

TOSHIRO HATA PRESENTS

波多利朗の

Funky Corner

文・撮影●波多 利朗 text and photo by Hata Toshiro
 (URL) <http://www.funkygoods.com/>
 (E-Mail) catty@mxp.mesh.ne.jp

永遠の名機、「Psion Series3」

ニキシー管時計のこと

筆者は、本誌2001年春号のFunky Cornerの前フリにおいて、ニキシー管を用いた電卓について述べたことがある。その中で「ニキシー管を使った時計や電卓を発売すれば、レトロブームの折流行るのではないか?」と書いた。その時は冗談半分だったのだが、まさか本当にニキシー管を使った時計が、現行品として販売されているとは夢にも思わなんだ!!!! (※ここでニキシー管についてご存知ない方は、検索エンジンで調査するか書店で本誌2001年春号を購入しよう!)

とある日、筆者の友人であるParker氏から、秋葉原でニキシー管を使用した時計が販売されているという情報が入った。半信半疑でヤマギワリビナ館へ行ってみると、確かにニキシー管時計が2万9,800円で販売されている。これには正直言って驚いたね…… (A)。

この時計はオランダはArnhemにあるArt Academyのデザイナー、Peter van der Jagt氏によって、1996年に製作されたものを、KARLSSONという会社が発売しているもの。デザインであるが、19×7×3.8cmの磨き上げたアルミニウムの本体上部に時・分・秒を示すニキシー管が6本剥き出しのまま搭載されているという、極めてシンプルなものである。しかし、シンプルなゆえにかえてニキシー管という素材が持つ魅力を十分に引き出しているような、そんなグッドデザインと言えるであろう (B)。

ところで、ニキシー (NIXIE) 管という名称の由来であるが、同梱されていた取り説によれば1952年、コンピュータの先駆者であるBurroughs CorporationのHaydu兄弟によって発明されたそうである。NIXIEという名称は、

「Numerical Indicator eXperimenta (数字表示の試み)」から引用された言葉だそうだ (C)。

このNIXIE CLOCKは、機能的には本当に単純な時計そのものである。せいぜい12/24時間表示の切り替えができる程度であり、アラーム等の余計なものは一切省いてある潔さがなかなか気持ち良い。時刻合わせはすべて背面にあるスイッチで行い、電源はACアダプタ (9V、300mA) を介して供給する。表示は、いわゆる初期ニキシー管のネオン放電のそれで、オレンジ色に浮かび上がる数字はほんのりと暖かい。レトロな表示デバイスということもあり輝度は十分ではないため、明るい所ではそれほど目立たないが、夜など薄暗い部屋に置くと効果満点だ (D)。

本体価格2万9,800円は、単機能の時計として見た場合には極めて高価であるが、ニキシー管に思い入れのある方にとっては、値段など関係無いであろう。実際、筆者もParker氏も、その場で購入してしまった。こういうのを典型的な衝動買いと言っただろうな、きつと……。このニキシー管時計は、現状取り寄せ商品となっている。筆者が購入した時は、商品が届くまで約10日程度だったので、そんなに待たされるということはなさそうだ。マニア向けの濃い商品と言えるものだが、ニキシー管に『異常』な愛情を感じている方は、是非購入を検討して頂きたいものだ。合掌!!!

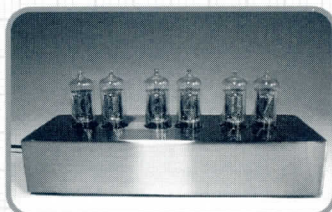
時代の終わり

本誌の読者であれば、7月12日付けの「MYCOM PC WEB」をきつとご覧になったことであろう。



④ KARLSSONのニキシー管時計の外観

磨き上げたアルミ本体の上にニキシー管が6本林立しているという、シンプルかつ合理的なデザイン。点灯していなければこれが時計であると判断するのは極めて困難。真空管式ラジオに間違われても仕方ない外観だ



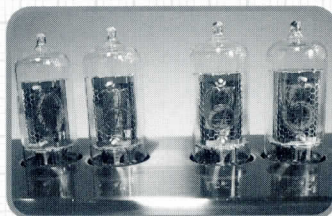
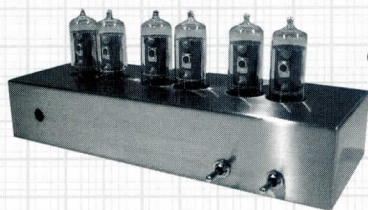
⑤ 点灯しているニキシー管

実際に時計として使用している状況はこんな感じ。オレンジの暖かい数字がボワッと浮かび上がる。輝度はそれほど高くない。今流行りの「癒し系」時計とでも言えるだろうか？

KARLSSONのニキシー管時計

⑥ ニキシー管時計本体背面

本体背面には、ACアダプタのコネクタ、12/24時間表示切替スイッチ及び時分設定用スイッチが実装されている。デザイン重視であるため、各スイッチの名称等は印刷されていない



⑦ ニキシー管のアップ

数字の形をした電極が積層状に格納されている様子が良くわかる。まさに芸術品的デバイス

「英Psionがコンシューマー向けPDA市場から撤退」
<http://pcweb.mycom.co.jp/news/2001/07/12/50.html>

そう、あの独特のデザインとセンスでバームトップ廃人どもを魅了した大英帝国のPDAメーカ、Psionが、ついにコンシューマ向けのPDAの開発中止に踏み切ったという記事である。

Psionといえば、DOSベースの謎ば〜機全盛の時代に、洗練されたデザインとOSを搭載した製品を発売し、ただ一社異彩を放ちまくっていたPDAメーカである。Series3aで日本市場でも注目を集め、Series5の特異な形状とせり出すキーボードで大ブレイクを引き起こしたことは、まだ記憶に新しい。

そのPsionが、コンシューマ向けPDA市場の不振を理由に、ついにPDA市場からの撤退に踏み切ったのである。確かに、最近のPsionはめっきり影が薄くなってしまった。思い返してみれば、様々な謎ば〜機が群雄割拠していた1993～95年頃が一番面白かったような気がするな。ついに来るべき時が来たかという感じがしないでもないが、それにしても寂しい限りだ。というわけで、今回のFunky Cornerでは、Psionの端末をご紹介します。

さて、PsionのPDAには様々な製品があるのだが、筆

者的には、WinCEライクなOSであるEPOC32を搭載したSeries5より、EPOC OS搭載のSeries3のほうに愛着を感じる。もともと筆者は非常につむじ曲がりの変人であり、マイナーなモノに異常な執着を示すタイプなので、ブレイクしてしまったSeries5にはあまり感心が無い。そんなわけで今回ご紹介する端末は、Psion Series3である。Series3は、3aが出る前の製品であり、いわばPsion製PDAの原器とも言える製品である。こういった製品をチョイスするあたり、いかにもひねくれ者の波多利朗的と言えるのではなかろうか？（と、自分で感心してどうする！ ^_^;;）(001)

Psion Series3が登場した時代

さてそのPsionであるが、日本市場でのSeries5のブレイクにより、それまであまり携帯端末に興味を持たなかった人たちがでもがPsionの名を聞くようになった。しかしそれ以前、Series3や3aが現役で活躍していた時代には、「Psion」の読み方すらわからない人たちが沢山いたことも事実である。実際、「プシオン」なんていったトンチンカンな読み方をするユーザが数多くいたため、「Psion」



Psion Series3のパッケージ一式
 パッケージ内容は、本体、取扱説明書一式、それと電池。パソコンとの接続ケーブルとソフトは、別売の商品を購入する



Series3のアップパーバージョンである3a
 液晶の解像度が上がり、より洗練された構成となったPsion Series3a

の発音を録音したファイルがネット上にアップロードされたこともあったくらいだ。

Psion製品の日本語化について積極的な展開を図っているEnfourのホームページ (<http://www.enfour.co.jp/>) によると、同社は1984年に「Organiser」と呼ばれる携帯情報端末を発売したようだ。また、少し古い資料ではあるが米国MobileOffice誌1995年4月号P60～61に掲載された「A Parade of Portables Past」という記事を見ると、「March 1990: Psion 1, a powerful PDA, is deployed.」なる記述が見受けられる。これらを見てもおわかりのように、Psionはパソコン初期から、携帯情報端末を積極的に発売していたメーカーであった。そして1991年には、今回ご紹介するSeries3を世に出している。

さて、そのSeries3初代機が発売された時期はどのようなものであったのかを簡単に見てみよう。Psion Series3は、1991年に発売された。その2年前である1989年は、初のDOSベースの携帯端末であるATARI PortfolioとPoqet PCが発売された、いわば謎ば〜機元年とも称せられる記念すべき年であった。それから2年後、1991年5月には、かの名作であるHP95LXが発売されている。また今も根強い人気を持つ古典的謎ば〜機、SHARP PC3000や、オアポケこと富士通のOASYS Pocketが発売されたのもこの年だ。

DOSベースで、どちらかというとも機能優先のデザインしかなかった当時において、突如出現したPsion Series3は、おそらく大変な反響を呼んだものと思われる。OSは独自のEPOCと呼ばれるものを用い、またその形状はあたかも二枚貝を髣髴とさせる一種独特なものであったからだ。例えるならば、1955年のバリ・サロンにて、衝撃のデビューを果たしたシトロエンDSといった感がないで

もない。

Series3は、その後1993年9月にSeries3aにバージョンアップされている。ちなみに同じ1993年5月には、HP95LXのアップパーバージョンであるHP100LXが発売されている (002)。

Psion Series3 ファミリの概要

次に、Psion Series3ファミリの製品について見てみよう。Series3ファミリには初代機である3の他に、3a、3c、3mxという3種類の製品が存在した。CPUは、mxを除く機種についてはV30Hという80C86コンパチの石を使用しており、mxのみについてはV30MXを使用している。クロック周波数はバージョンが上がるにつれて、次第に高速になっている。

Series3と3aの大きな違いは、何と言っても液晶画面である。3ではドット数が少なくフォント表示も粗いモノクロ液晶であったが、3aでは3階調表示に加え解像度がアップし、表示が繊細になった。同時に液晶のアクティブエリアも拡大され、情報量が格段に向上している。内蔵RAM容量も256KBから2MBまで拡張され、実用的で完成されたモデルとなっている。PsionのPDAの中でも、3aの人气がとくに高いことも頷けるものがある。

3aのスペック強化版として発売されたモデルが3cだ。3cはCPUクロックが従来製品の倍速となり、米国仕様モデルには液晶にバックライトが奢られた。また、赤外線通信ポートが搭載されたのも、このモデルからである。シリアルポートのコネクタ形状も、従来製品とは異なったものになった。3aと3cの最大の相違点は、外装であろう。3cでは外装にラバー系の塗装を施してあるため、手に持



003 Psion Series3c

Series3aのマナーチェンジ版である3c。外装を除けば良いマシンなのだが……

った感じは「しっとり」している。実は筆者はこの感触が苦手だ。そのため、3cには今ひとつ魅力を感じない(003)。

3シリーズの最終作として世に出た製品が3mxである。実は、3mxが発売された時には、すでにEPOC32 OSを搭載した新世代のPDA、Series5が発売されていた。にもかかわらず敢えて3mxを出したのは、おそらくユーザからの根強い人気があったからであろう。ルパン三世の車として有名なFIAT500のLタイプが1972年に製造を中止し、その後継を126に譲ったにもかかわらず、ユーザからの支持により旧モデルである500のRタイプを発売し、1975年まで製造したという経緯に、一脈通じるものがあるように感じてならない(004、005)。

それはさておきこの3mxであるが、CPUにV30MXを採用し、動作クロックも初代3の7.2倍という爆速ターボモデルとなっている。シリーズ最後にふさわしく、最も完成されたSeries3と言えるであろう。バックアップ用リチウ



004 Psion Series3mx

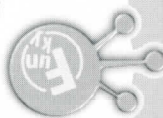
Series3の最終バージョン。最強に強まりまくったマシンと言える3mxは、動作スピードも文句なしに速い!

ム電池も、当時入手しづらかったCR1620から、より一般的なCR2025に改められており、こういった細かいところにも使いやすさを追求したモデルであることが伺われる。

Series3として発売された製品は以上であるが、この他にも若干異端ではあるが基本的に同一のアーキテクチャを採用したマシンが存在した。それがWorkaboutとSienaである(006)。

Workaboutは防塵防水加工を施した現場監督向けのPsionとも呼べる製品であり、情報収集端末として専用のI/Oポートを搭載した変り種だった。またSienaについてはメモリーカードドライブすらも搭載しておらず、徹底的に小型化にこだわった製品だ。なお、SienaでSSDを使うためには、専用の外付けドライブが必要であった(007)。

これら2製品はどちらも日本ではほとんど紹介されることが無く、現在では激レアモデルとなっている。さすがの筆者も、Workaboutについては、以前寄稿していて



005 FIAT 500L

イタリアの大衆車であったFIAT500。掲載した写真は、最終モデルのRタイプでは無くLタイプである。狭い、遅い、臭いという3拍子揃った優れものだが、実際運転してみると非常に楽しいことこの上ない

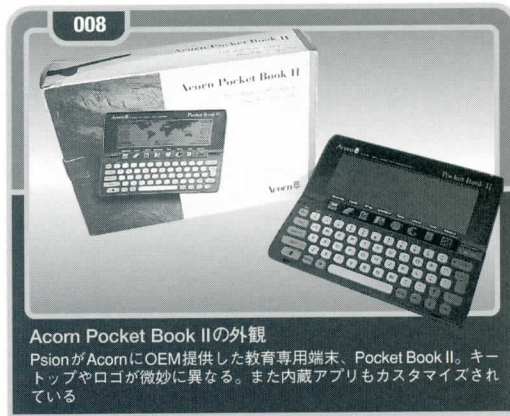


006 Psion Sienaの外観

Psion製端末の激レアモデルであるSiena。こんなにレアになっちゃうんだったら、もう1台買っておくべきであったと深く後悔している今日この頃である



007 Siena専用外付けSSDドライブ
 本体にSSDドライブを持たないSienaで、SSDの読み書きを行うための専用外付けドライブ。Siena本体以上にレア度の高い製品である



008 Acorn Pocket Book IIの外観
 PsionがAcornにOEM提供した教育専用端末、Pocket Book II。キーボードやロゴが微妙に異なる。また内蔵アプリもカスタマイズされている

その後倒産してしまった某PC互換機関連の出版社から一時期借用したことがあるだけで現状所有しておらず、Psionコレクションに画竜点睛を欠いている（倒産することが判っていたら、取り損ねた原稿料代わりにもらっておくべきだったと後悔している、なんてことは、不謹慎なことなので、とてもこのような場所では書けない。

^ ^;)。

ところで、Psionは自社製品のOEM提供も行ってた。ここに示したのは、Acorn Computerが1995年5月に教育用途用端末として発売した、Acorn Pocket Book IIである。このマシンはPsion Series3aがベースとなっている。ロゴとキーボードがカスタマイズされており、メニューセレクトボタンもPsion製品と微妙に異なる。キーボード上では、PsionキーがAcornキーに置き換えられている。またパッケージもPsionの黄色を基調としたものから、白地に緑のラインの入ったものになっている。この緑色はAcornのマークの色であ

る(008)。

以下にPsion Series3ファミリア+αのスペック一覧を示しておく。

🐞 Psion Series3の構造

Psion Series3の構造は、既にご存知の方も多いと思われるが非常にユニークだ。LCDパネルを開くと、中央に配置されたタッチパネルがせり上がってくると同時に、本体裏面に配置された電池収納部が出張りスタンドの役目を果たすようになる。本体裏面には、中央にスピーカが置かれ、両端にはメモ리카ードスロットカバーが配置されている。このカバーであるが、まるで昆虫の羽根のように開閉する優れたデザインのものだ(009、010)。

本体の外装は、まるでグラファイトのような見事な造りである。3cではラバーコーティングされて興奮めであったが、この元祖3は実に良い！ こういった高級感の

●Psion Series 3、3a、3c、3mx、Workabout、Sienaの仕様比較

モデル名称	Psion Series 3	Psion Series 3a	Psion Series 3c
CPU	V30H (3.84MHz)	V30H (3.84MHz)	V30H (7.68MHz)
搭載メモリ容量	1MB ROM、256KB RAM	1MB ROM、2MB RAM	2MB ROM、1MB/2MB RAM
ディスプレイ	240×80dot	480×160dot	480×160dot 米国仕様はバックライト付
アクティブエリア	97×39mm	126×45mm	126×45mm
キーボード	QWERTY 58 Key	QWERTY 58 Key	QWERTY 58 Key
I/Oポート	シリアルポート×1 (Max 9600bps)	シリアルポート×1 (Max 19200bps)	RS232Cポート×1 IrDAポート×1
サウンド機能	ビエゾプザー	8bit 11KHz PCM	8bit 11KHz PCM
本体重量	275g (バッテリー込み)	275g (バッテリー込み)	275g (バッテリー込み)
メインバッテリー	単三乾電池2本	単三乾電池2本	単三乾電池2本
サブバッテリー	CR1620	CR1620	CR1620
メモ리카ード	SSD Drive×2	SSD Drive×2	SSD Drive×2
外形寸法	163×85×23mm	163×85×23mm	165×85×22mm
OS	EPOC	EPOC	EPOC



Psion Series3の外観写真

一見して3aと変わらないように思えるが、良く見ると本体表面の外装が大変凝っており見事である



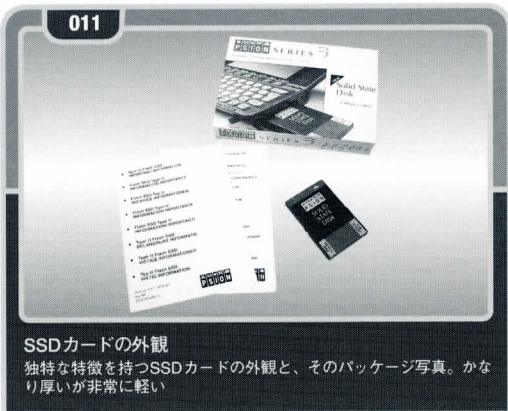
メモ리카ードスロットのカバー

カバーを開けたところは、まるで昆虫が羽を広げたような感じを受ける。ディテールのデザインがここまで考えられた携帯端末は、そうは無いだろう

ある外装を持ったPDAには、最近お目にかかったことがない。

カードスロットはA、Bの2基が用意されている。Psion Series3で使用するメモ리카ードは、PCMCIA規格のものでは無い。SSD (Solid State Disk) という名称が付いた独自仕様のものである。このSSDには、フラッシュメモリを使用したFlash SSDと、SRAMを使用したRAM SSDの2種類が存在した。大きさは64×41×6mm程度で、Series3本体とは6ピンのコネクタを介して接続される。FlashSSDの場合、4MBの容量のものまでが製品化されていた (011)。

さてこのFlash SSDであるが、かなりユニークな構造だ。現在一般的に販売されているフラッシュメモ리카ードと異なり、一種のWrite Once Diskのように扱われる。メモリにデータを書き込んで行くのが当然であるがメモリ容量がどんどん減少していくのだが、書き込んだデータを消去してもメモリ容量は増加しない。通常のWrite



SSDカードの外観

独特な特徴を持つSSDカードの外観と、そのパッケージ写真。かなり厚いが非常に軽い

Once Diskと異なる点は、メモ리카ード全体を再フォーマットすれば、また初期の容量に復活することである。カードのメモリ容量を全て使い切ってしまったとしても、フォーマットすることによりゾンビのごとく蘇り、新品のカードとして使うことができるという、ちょっと不気味な仕様となっている。

本体のカードスロットBの中には、バックアップ用リチウムボタン電池の格納スペースが設けられている。Series3で使用するボタン電池は、CR1620というちょっと特殊なサイズのものだ。本製品が現役であった当時では、かなり入手困難な型番の電池であり、掲示板などでこの電池をどこで入手するかという話題をよく見かけたものだ。現在では、東急ハンズあたりをうろついていれば、PanasonicブランドのCR1620をあつけないほど簡単に入手することができる。いや、いい時代になったもんだねえ。

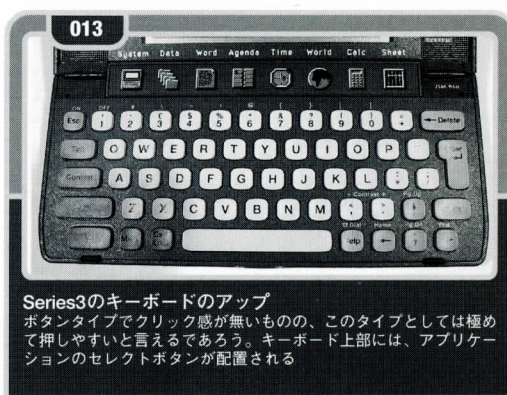
さて、メインバッテリーは本体裏面上部に格

Psion Series 3mx	Psion Workabout	Psion Siena
V30MX (27.684MHz)	V30H (7.68MHz)	V30H (7.68MHz)
2MB ROM、1MB/2MB RAM	1MB RAM、1MB ROM	1MB ROM、512KB RAM
480×160dot	240×100dot	240×160dot
バックライト付き	バックライト付き	バックライト付き
126×45mm	62.4×30mm	65×44.6mm
QWERTY 58 Key	57キー	QWERTY 48キー+20キーパッド
RS232Cポート×1	RS232 AT	シリアル (専用コネクタ)
IrDAポート×1	RS232 TTL	IrDAポート
	LIF-PFS Connector	
8bit 11KHz PCM	ビエゾプザー	無し
275g (バッテリー込み)	325g (バッテリー込み)	180g (バッテリー込み)
単三乾電池2本	単三乾電池2本	単四乾電池2本
CR2025	CR1620	CR1620
SSD Drive×2	SSD Drive×2	無し
165×85×22mm	180×90×35mm	150×70×18mm
EPOC	EPOC	EPOC



012 バッテリーの格納状況

Series3のバッテリーは、このように搭載される。バッテリー格納エリアがスタンドの足のよう機能するあたり、かなり考えられた構造と言えるであろう。Series3のヒンジ部分は壊れやすいので、取扱いはとくに注意が必要だ



013 Series3のキーボードのアップ

ボタンタイプでクリック感が無いものの、このタイプとしては極めて押しやすいと言えるであろう。キーボード上部には、アプリケーションのセレクトボタンが配置される

納する。使用するバッテリーは単三乾電池2本である。バッテリーの持続時間は極めて長く、通常の使い方では、3週間～1カ月程度は楽に持つ。省電力対策はかなり優れていると言えるであろう (012)。

Series3のキーボードはボタンタイプであるが、テンキーが無いために比較的余裕を持って配置されており、この手のボタンタイプとしては極めて押しやすいと言えるであろう。ただし、クリック感が無くキーストロークも浅いため、タッチタイピングは困難だ。キー配列はQWERTYの58キーとなっている。キーボード上部には、8個のアプリケーションセレクトボタンが配置されている (013)。

Series3本体には、専用のアプリケーションソフトウェアがROMで内蔵されている。以下に内蔵ソフトを示す。

- ・ SYSTEM SHELL : アプリケーション・コントローラ
- ・ DATA : データベース・ソフト
- ・ WORD : ワードプロセッサ
- ・ AGENDA : 個人予定表
- ・ TIME : 時計機能 (アラーム付き)
- ・ WORLD : 世界主要都市データベース
- ・ CALC : 電卓機能
- ・ SHEET : スプレッドシート (Add-On Softで供給)

Series3に用いられているCPUは、80C86コンパチブルのV30H (3.84MHz) である。動作クロック周波数が気絶しように遅いがOSとアプリケーションが軽いこともあり、使ってみると意外に軽快だ。しかし、内蔵メモリが256KBというのは、さすがに少ないな。

Series3のLCDパネルは、240×80ドットの2階調モノクロ液晶である。これが3aになると、480×160ドットと解像度がアップし、さらに白/グレー/黒の3階調液晶表示に進化する (014)。

Pisonシリーズで用いているOSは、EPOC (エポック) OSと呼ばれている独自仕様のものだ。このOSは、Pison

のSIBO (Single Board Organizer) アーキテクチャに基づいて設計されている。EPOCの名称は、「(新) 時代」を意味する“epoch”に由来する。筆者などは、「エポック」と聞くとついついエポック社の野球盤ゲームやニューバスケケットボールゲームなどを思い浮かべてしまうな。

🔗 日本語を扱う

Psion Series3ファミリでは、OSレベルでの日本語化は実現できていない。その代わりに、Series3ファミリ上で日本語でメモを取ることができる「JEdit」というエディタが存在する。このソフトを作成した人が、世捨て人兼廃人である「柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos) 氏」である。

筆者は常々「柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos) 氏を知らないPsionユーザはモグリである」と思っているのだが、氏が開発したアプリケーションのおかげでPsion Series3ファミリ上で日本語を取り扱えるようになった功績は小さくない。ただし、氏はかなりの変人で (普通の廃人だったら、ATARI Portfolioの上でFORTHプログラミングなんかしないもんなあ)、しかもほとんど表に出ることが無いため、その存在自体、マックス・ヘッドルームのように架空のものではないかとのウワサも出ているそうである。冗談はさておき、JEditを使用すれば、Series3から3mx、果てはSienaとWorkaboutに至るまで、日本語でメモを取ることが可能となるのだ。

以下にSeries3用JEditの導入方法を示す。

1. ソフトウェアの入手

Series3上でJEditを使うためには、プログラム本体、フォント、辞書の3つのファイルが必要となる。下記3つのファイルを何らかの方法を用いて入手する。ちなみにエディタ本体と専用フォントの入手先は、開設以来気が向い





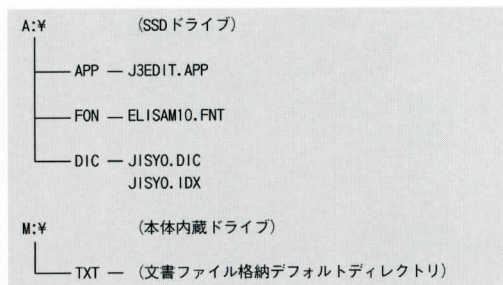
Series3の液晶画面
シェルが起動している画面。表示エリアは狭いものの、視認性は十分だ

た時以外全く内容を更新せず、ダメなホームページの見本と化している筆者のサイトからだ。

- Psion Series3専用日本語エディタ本体 (J3EDIT.APP)
http://www.funkygoods.com/nazopa/psion_s.htm
J3ED1A1B.LZH Psion Series3用日本語エディタ (Ver1.A.1.β)
- 恵梨沙フォントPsion版 (ELISAM10.FNT)
http://www.funkygoods.com/nazopa/psion_s.htm
ELISAM10.LZH Psion Series3用8ドット恵梨沙フォント (Ver1.0)
- かな漢字変換用辞書ファイル (JISYO.DIC, JISYO.IDX)
Hewlett-Packard PC users' Forum (FHPPC)
データライブラリ15番 (旧FYHP LX関連ソフト&データ) *1
18番 JISYO_L.LZH JMOMO用辞書 (大) *1リードオンリー

2.ファイルの転送

準備したファイルを、Series3本体に転送する。今回は、Series3にSSDを導入した環境で、JEditをインストールしてみた。Psionシリーズでは、Mドライブが本体内蔵のRAMドライブとなっており、A及びBドライブが拡張メモリカード用ドライブとしてアサインされる。今回は、以下のようなディレクトリ構成で、ソフトウェアをインストールした。



フォントファイルの格納先として、Psion内蔵のドライブ (Mドライブ) は使用しないようにする。これは、内蔵ドライブはアクセススピードが遅いため、文字表示速

度が大幅に低下してしまうためである。また、文書ファイル格納用ディレクトリは、できるだけ内蔵ドライブ (Mドライブ) またはRAMSSDドライブ上に作成しよう。文書ファイルは、頻繁に更新されるため、前述したWrite OnceタイプのFALSH SSDに格納すると、ファイルを更新する度にディスクスペースを消費してしまうという、かなりおマヌケなことになってしまう。

3.アプリケーションの登録

アプリケーションを格納できたら、Psion標準のインストール方法 (PSION+I) で、JEditをシステムスクリーンに登録すれば、インストールは終了する (015)。

4.JEditの制限事項

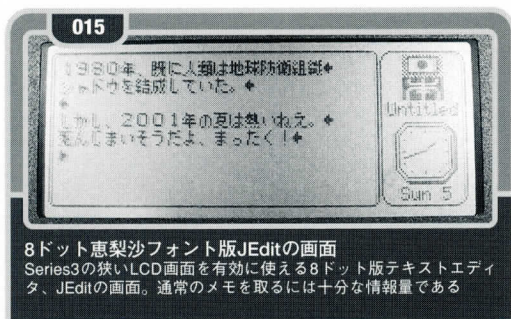
すでに述べたように、Psion Series3では、EPOC OSと呼ばれる独自仕様のOSを用いマルチタスク環境を実現している。このOSの仕様であるが、各プロセス実行時のメモリサイズが、コードとデータとをあわせて64KB以下に制限されているのだ。また、Psionのカードメモリは、SSDというこれまた独自仕様のカードを採用している。このような事情より、JEditには下記に示すような制限事項が生じている。

- 文書ファイルの最大容量は16KBまで
- 辞書バッファサイズは26KBまで
- 辞書の自動学習は、辞書を格納したドライブがRAM SSDの場合にのみ有効
- 半角カナには対応していない

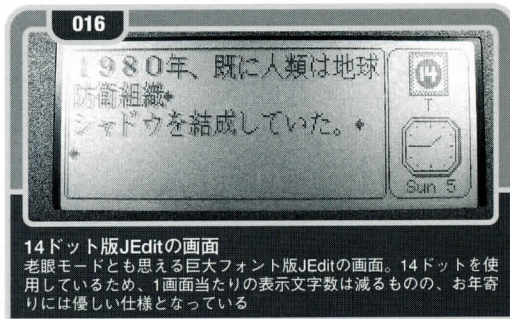
今回は8ドットの恵梨沙フォントを使ったJEditをご紹介したが、実は14ドットフォントを用いたバージョンもある。14ドットバージョンは、さしずめ老眼モードとも呼べるもので、とにかく字がでかいのなんの。実用云々は別として、かなり異様なメモ帳と言えるであろう (016)。

🌀 あとがき

筆者の悪友であるRandy氏がまたまたとんでもないモノを発掘してきたので、是非あとがきにご紹介させて頂きたい。筆者が小学校～中学校の時代には、荷台に自動車のような方向指示装置 (フラッシャー) を付けた多段変速の自転車が発行したものだ。右折や左折の際にハンドル付近に設置したスイッチを操作することによって、曲がる方向にライトが流れるように点滅し、なおかつご丁



8ドット恵梨沙フォント版JEditの画面
Series3の狭いLCD画面を有効に使える8ドット版テキストエディタ、JEditの画面。通常のメモを取るには十分な情報量である



14ドット版JEditの画面
老眼モードとも思える巨大フォント版JEditの画面。14ドットを使用しているため、1画面当たりの表示文字数は減るものの、お年寄りには優しい仕様となっている

寧にも音も出るといった、かなり贅沢な仕様になっていたような思い出がある。ところが、これを超越する商品が存在していた！ (E)

東京は杉並区にある、濃いマニアの方には有名な某自転車ショップの倉庫で発掘された「MARUISHI SUPER-6」は、自転車のギアチェンジをナント！車のシフトパターンで行うという、ぶっ飛びもののグッズである。この製品は、荷台部分に制御装置本体を搭載し、ギアのチェンジレバーを取り付ける部分に、シフト操作部を設置する。

このシフト操作部であるが、シフトノブも含めて自動車と全く同じ。本製品は6段変速専用なのだが、1速から6速までのシフトパターンが記載されている。自動車と異なる点はバックギアが無いことで、これは当然といえば当然、あったら大変である。実際に操作してみると、シフトはコクコクと小気味良く決まり、ストロークも短い。まるで筆者の愛車であるHONDA BEATのようだ (F)。

動作だが、荷台に設置する制御ボックス内に単一乾電池を3本直列に搭載し、これを電源とする。制御ボックスとシフト操作部とは、2本の6Pコネクタと電源ケーブル

で接続されており、シフト操作を行うと何速に入ったかという情報が制御ボックスに伝達される。制御ボックスからは、変速ギアを操作するワイヤーが出ており、シフトノブによって選択されたギアにセットするという仕組みになっている。しかし、この制御ボックス上にデカデカと書かれた「PC」の文字は、一体何なんだ！ (G)

たかだかギアチェンジを行うだけなのに、ここまでのギミックを施すというのも、なかなか凄いものがある。ギアチェンジくらいレバーで十分じゃんかよ？って思わず言いたくなってしまうような商品であるが、自転車をコテコテにデコレートしていた時代を象徴するようで面白い。本体には「S55.08.07」の記載があった。昭和55年、すなわち1980年、既に人類は地球防衛組織「シャドウ」を結成し、スターウォーズ「帝国の逆襲」が公開され、ルービック・キューブが発売され、「赤信号、みんなで渡ればこわくない」が流行し、松田聖子が「青い珊瑚礁」を歌っていた年に、この商品は発売されている。今見るとズッコケものの商品ではあるが、当時の夢多き時代を反映していて、妙に懐かしくなってしまった。あの頃は良かったねえ……。



BACK TO THE GOOD OLD DAYS

E 外観

自転車のギアチェンジを、車のシフトレバーのように行うという、空前絶後の珍奇商品。シフト操作部と本体制御部から成る

思わずぶっとんでしまうこの商品

MARUISHIの SUPER-6

F シフト操作部

雲間気的にはまるで「6速マニュアルミッション車」！ただしバックギアは無い（あったら恐いな！）。シフトのストロークは短く、コクコクと小気味良く決まる

G 制御部

制御部は自転車の荷台付近に取り付け、ワイヤーを変速ギアに接続する。電源は単一乾電池3本。本体上部にデカデカと書かれた「PC」の2文字が意味するところは不明